

(1. 書評論文)

1-1. “恐怖”と“不安”の社会学

——確実性と不確実性から検討する“恐怖”と“不安”——

奥井智之『恐怖と不安の社会学』

(弘文堂、2014年)

中村 健太

1 はじめに

本書は、最終章に「連帯－クールに向き合う」という章を設けている。そこで著者は「ますますグローバル化し、個人化する社会は、わたしたちの恐怖と不安の温床である。－わたしたちは今日、そういう恐怖と不安にクールに向き合うことを求められている」(本書：156-157)と述べる。著者がいうように現代社会は、特定の対象に向けられた憎悪や暴力が跋扈し、人びとが他者にたいする恐怖や不安を大なり小なり抱いている時代だということができる。それはたとえば、我々はいつどこにいてもテロの標的にされる可能性があるという現実直面している一方で、今年1月にアメリカ大統領に就任したドナルド・トランプのような、テロの脅威を逆手に取る形でマイノリティにたいして激しい攻撃を加え、国民の支持を得る政治家がいるという現実が存在していることから容易に理解できることであろう。

このような、社会が大きく揺らぎ、人びとがコミュニティのつながりを頼りにできなくなっている状態を、恐怖と不安というテーマから分析した本書は、社会を見つめる学問である社会学にとって重要な意味を持つものになるだろう。なぜなら、恐怖や不安という抽象的だが人間にとって根源的な感情を用いて、政治やイデオロギーの領域に回収されてしまうような現代社会の諸問題を分析することは、近視眼的な目線からの考察ではなく、人間が社会を形成し、他者とともに生きるように(生きざるを得ないように)なってからの長い歴史を踏まえた巨視的な視点からの考察を可能にすると評者は考えるからである。そこで評者は本稿を、恐怖と不安という概念が社会学においてどのような意義をもつのかということを検討するために執筆する。またさらに評者が、恐怖と不安を扱った文献を単に読むだけでなく丁寧に分析し評価を与えることが、恐怖と不安という概念を経由することで見えてくる、現代社会の諸問題にかんする新たな視点を提供するための準備材料になると考えたことも、本書を書評の対象に選定した一つの理由である。

ここで、本稿の構成を説明する。本稿はまず各章の概要を示し(1)、次に本書の社会学的意義について検討したうえで(2)本書の持つ問題点を指摘し、最後にその問題点への評者なりの解決策を提示する(3)という流れで構成される。

2 本書の概要

本書は、「はじめに」と「おわりに」を除いた七章で構成されている。本書を通底するテーマは言うまでもなく恐怖と不安なのだが、その中身は現代的な問いに特化した章と、人間の持つ根源的な恐怖と不安に焦点を当てて論じた章とに大別することが可能である。また、各章の表題は、その章で著者が分析しているさまざまな事象（小説などの文芸作品も多く含まれる）を繋ぎ合わせる象徴的な名詞と副題からなっている。以下では、次章から行われる本書の評価に向けて一定の道筋をつけるために各章の概要を示す。

第一章「原罪－白鯨を追い求める」では、人間の持つ恐怖と不安の根源に宿る知性という存在が、アダムとイヴの楽園追放の物語を手掛かりに論じられる。アダムとイヴの物語が参照されているのは、著者が、人間の持つ恐怖と不安の根源に知性が存在しており「知性（をもつこと）は、そういう人間の原罪の最たるもの」（本書：36）だと考えているからである。著者は、楽園追放を通じて、人間が知的創造性＝自己決定権を手に入れたと分析する。そのうえで、人間が知的創造性＝自己決定権を持ったことのネガティブな側面に言及する。ここでは著者は死に着目し、人間が死から逃れられないという事実を知っているということこそが、最大の恐怖と不安の源であるとしている。そして、今日の死の大半が、何らかの社会関係のなかで起こっているとし、ゆえに今日の我々は社会関係に恐怖と不安を抱いていると分析している。

第二章「分離－死をイメージする」では、人間が“われわれ”＝秩序と“かれら”＝混沌を、恣意的に区別してきたことを提示する。そして、区別された二つのうちの“かれら”の方、つまり未知の方に充満しているのが恐怖と不安であるとする。著者は、社会が秩序と混沌を区別することで成立してきたとするが、近代社会になると、この区別に資本の論理が介入してくるといふ。そして我々は、我々が普段生活しているコミュニティに資本の論理が介入することで、秩序が内側から崩壊するという現実と直面していると分析する。

第三章「信仰－冒険に立ち向かう」では、前章でみたコミュニティの喪失によって、人間が個人化することが示される。個人化した人間は、自分の行うことを自分で決められる自己決定権を持つ。それは理想であると同時に、常に自分自身に全責任が委ねられているという「恐怖と不安に満ちた状況」（本書：70）であると著者はいう。人びとはその恐怖と不安に満ちた状態から、信仰によって解放されようとするという。だが、ここでいう信仰とは、かつて E. デュルケムが論じたような、社会を統合するための役割をもった宗教が対象になるのではなく、一人一人が自分だけの神をもち、その神をそれぞれが信じることで行われる信仰であることを U. ベックの議論を参照しつつ述べる。

第四章「喪失－亡霊を呼び起こす」では、日本人にとってコミュニティとは何かという問いが検討される。ここでは、日本人におけるコミュニティ喪失のもつ意味が主題となっており、日本の文芸作品や柳田國男『遠野物語』などを参照しながら議論が進められる。著者は、コミュニティに埋没してしまうことの恐怖や不安と、コミュニティから乖離することへの恐怖や不

安は「相即不離の関係にある」（本書：87-88）と考察する。また、近代になって出てきた市民社会はそれまであったコミュニティを撲滅し、コミュニティの撲滅は人びとを恐怖と不安にさらしてきたとする。そして近代社会は、失われたコミュニティの葬送の儀礼としてホラーブームを内に孕んでおり、それは、人びとが近代以降、コミュニティから離れて自由になったと同時に、何かを喪失したことを意味しているという。

第五章「危機－非常事態を生きる」では、「不安定化し、無秩序化する世界のなかで、自分自身の生の透視図^{パースペクティブ}を思い描くこともままならぬ」（本書：102）になった現代における、生の危機的状況を問題として論じている。著者は、何のために生きるのかという本質的な意味を見失うことは、日々の糧を得られるかということ以上の恐怖と不安をもたらすという。「わたしたちの生は今日、非常事態（emergency）の様相を呈して」（本書：116）おり、この時にこそ、社会的統合が必要になると論じるが、それすらもあてにできないのが現状の課題であるとしている。

第六章「暴力－憎悪が憎悪を生む」では「恐怖と不安の社会学」の文脈で、暴力の現代的様相が考察されていく。今日、我々は恒常的にコミュニティ内やコミュニティ間での紛争、または予測不可能なテロといった暴力に脅かされている。こうした“大きな暴力”は人々を恐怖と不安に陥れるが、他方で、虐待やDVといった“小さな暴力”もまた存在している。そしてこれら二つの暴力は無縁ではないと著者は論じる。なぜなら、グローバル化し、個人化した現代社会においては、日常的な憎悪が暴力を生む契機となり、それが人びとに恐怖や不安を与えることになるからである。

第七章「連帯－クールに向き合う」では、人びとの結合と分離の諸相を観察したうえで、今日における社会的連帯の可能性についての考察を行っている。まず著者は、ミスコミュニケーションはこの上ない恐怖と不安をもたらすが、それはコミュニケーションの成立の反転としてつねに他者との関係性に織り込まれているということ、恋愛をとおして説明する。ここで著者は愛がコミュニティ形成への契機をつくと述べる。そして、コミュニティ形成に向けた連帯は恐怖と不安の克服に向けて重要であるが、現代はグローバル化＝個人化の影響により社会が分断されているという現状があるという。この社会分断は、人びとを恐怖と不安へと誘うが、恐怖と不安に対抗するための連帯の再構築は容易ではなく、そこにおいては、人びとが恐怖と不安に冷静に向き合い、他者との連帯にもクールに（冷静に）向き合う必要が出てくるとしている。

3 本書の社会学的意義

著者は、本書を「それら（評者注：恐怖と不安）を、社会学的な概念として位置づけ」（本書：164）るという目論見のもとで執筆したという。それゆえ本書では、他者とのコミュニケーションにかんするミクロな場面から、雇用の流動化などの現代社会に横たわるマクロな問題まで非常に広範なテーマを取り上げ、それらを恐怖と不安という観点から分析している。しか

し、それぞれの議論を散漫なまま終わらせるのではなく、恐怖と不安という本書に通底する概念を用いることで、各章のテーマをグローバル化に伴うコミュニティの喪失と個人化という現代的な問題にまとめることに成功している。このことは同時に、コミュニティの喪失と個人化という現代社会特有の課題の根底に流れる恐怖と不安が、社会学にとっての大きな課題の一つであるということの提示にもなっている。評者はこの、人びとが持つ恐怖と不安が社会学にとって追究すべき大きなテーマとなる、という点を提示したことが、本書の評価すべき点だと考える。以下、評価点について、恐怖と不安を分析概念として立ち上げることがいかに社会学にとって意義のあることなのか、という観点から考察を行う。

3-1. 共有価値から共通感覚へ

著者は、恐怖と不安の社会学の学問的根拠として「共通感覚」(本書：159)を提示している。共通感覚とは、私が何かを恐れたり不安がったりしている際には、他の人もその何かにたいして同様に恐怖や不安を抱いているという、自分と自分以外の他者が共通して抱く間主観的な感覚のことである。著者は、本書がこの共通感覚に基づいた議論であることを、「おわりに」で説明している。評者が、共通感覚によってつくり出される恐怖と不安というネガティブな概念を社会的に有効な概念として位置づけようとした本書の試みを評価するのは、恐怖や不安が連帯や結合といったポジティブな概念と表裏一体の関係にあり、現代社会では、恐怖や不安といった感覚の方が、社会を分析するうえでより有効な概念だと考えるからである。

社会学はこれまで、社会は人びとをいかにしてつなぎ合わせるのかといった問いや、社会秩序はいかにして達成できるのかといった問いに取り組むことで発展してきた¹⁾。しかし、ジェンダーや環境問題といった新たな社会問題の出現によって、社会学は学問的变化を遂げて多様なテーマを扱うようになり、パーソンズに代表されるような、いかにして社会秩序が成立しているのかといった壮大な問いは学問の主流から撤退を余儀なくされた。盛山和夫はこうした状況について「社会学のアイデンティティの拡散であり、伝統的な社会学とのつながりの希薄化であり、学問的共同性の弱まりを意味する」(2011：ii-iii)と論じている。このような、パーソンズの論じた共有価値による社会統合の信憑性が失われた現代社会において、社会学は人びとと社会の関係性をどのように捉えるべきなのか。この問いにたいする一つの答えが、本書の提示した恐怖と不安という共通感覚である。現代を代表する社会学理論であるリスク社会論を構築したU. ベックが「危険社会という社会形態の特徴は不安からの連帯が生じ、それが政治的な力となることにある」(Beck：1986=1998：75)と述べているように、これまでの社会が階級社会という、平等への理想にかかわって発展してきたのに対して、リスクが偏在する現代社会では、不安が人びとを連帯に向かわせる。つまり、現代社会においては、恐怖や不安といった抽象的な感覚が人びとを結び合わせるためのもっとも大きな要因のひとつとなったということである。このような、富める者にも貧しい者にも等しく与えられたリスクという存在は、人

1) 例えば、三上(2013)を参照。

びとを不安に陥らせ、それゆえに人びとを連帯させる。本書では若干の留保を含みつつも、ジンメル議論を用いながら「わたしたちの今日の恐怖と不安の根源が社会的分断にあるならば、社会的連帯によってそれに対処することもできる」（本書：142）と述べられている。これは、恐怖と不安をなくするために社会的連帯が必要であるという風にも読めるが、主張の見方を変えると、社会に存在する恐怖と不安が連帯を生み出す契機となると読むこともできる。本書は、バックのいう不安による連帯という考えを踏襲しながら、恐怖や不安といったネガティブな存在を回避するだけでなく、それらと向き合うことが重要であると説いているのだ。それでは、ネガティブな意味合いで語られることの多い恐怖や不安といった共通感覚に、なぜいま目を向けるべきなのか。次節では、本書の議論を踏まえつつその点を検討する。

3-2. 恐怖と不安がもたらす分断と連帯

本書は、現代社会における恐怖と不安というテーマを扱っているが、第一章及び第二章では、人間の持つ根源的な恐怖と不安というものに焦点をあてて分析を行っている。本節では、この根源的な恐怖と不安を検討することで、恐怖と不安を社会的に有効な概念として位置づけることの意義について考察する。

本書第二章で著者は、日本の伝統芸能である能の事例を持ち出しながら「非日常的な世界の存在の予感こそが、わたしたちの日常的な恐怖や不安の源泉なのである」（本書：42）と論じている。つまり、自分たちが普段生活している領域とは分断された得体の知れない空間にこそ、恐怖や不安を抱かせるものが潜んでいるということである。三上剛史は恐怖や不安による連帯に危機感を抱きつつも「現代社会に生じている新たな分離の様式が（中略）新種の（もしそう言ってよければ）“新たな結合”（接続）を生み出してゆくことに繋がるのではないか」（2013：29）と論じている。分断は、他者を自分がいる世界の外側に立たせる。我々の世界の外側にいる他者を、我々はコントロールできない。そして、その外側にいるコントロール不可能な他者にたいして人間は恐怖や不安を抱く。だが、それは他者にとっても同じことであり、この相互に抱かれた恐怖と不安が、あらかじめ結合されているがゆえに存在している連帯とは異なった、新たな連帯を生むことに繋がるとも考えられる。また、分断された、我々の外側にいる他者にたいしての恐怖や不安を、共通感覚として自分と別の誰かが共有できたならば、その間には連帯が生じるといえるだろう²⁾。本書は「恐怖と不安は、人間の知性の限界に起因」（本書：17）するとしている。そして著者は、知性の限界に起因した人間の恐怖と不安ということを示す一例として東日本大震災を出し、東日本大震災が「家族・地域・国家などを単位とするコミュニティ感覚」を生み出し「逆説的に、人々の絆を強める役割も果たした」（本書：160）と論じている。この例は上述した、ある他者³⁾にたいして抱かれる恐怖や不安が人びと

2) この議論はスケープゴート論のように聞こえるかもしれないが、評者はここで連帯を生み出すために他者への恐怖や不安が必要だといっているのではなく、他者への恐怖や不安によって生まれた連帯が、他者を排斥するのではなく、他者のもつ恐怖や不安と向き合わせる契機になるということの意義を論じている。

3) ここでは、われわれの外側にあり、知性の限界に起因する恐怖と不安を呼び起こすものという観点

を連帯されるというものと重なる。このように、我々と他者が分離・分断させられ、恐怖や不安を抱いているときにこそ、あらかじめ結合していることによって生まれる連帯とは異なった、新たなる連帯が生まれる可能性があると言うことができる。こういった点を踏まえると、恐怖と不安を社会的に意味のある概念として位置づけるという本書の試みは、社会学にとって重要な問題である連帯や結合といったテーマを現代社会の状況に即して考えていくうえで、大きな意義を持つものだと結論付けられる。

4 本書の課題

本章では、本書に内在する課題点を指摘し、その課題点を乗り越えるための方策を考察する。評者は前章で、恐怖と不安を、現代社会を分析するための概念として提示したことが本書の評価点だと論じた。だが同時に評者は、恐怖と不安を区別することなく一括りにして議論を行ったことが、本書が抱える最大の問題点であると考えている。

以下、節を変えて、この問題点について詳細に検討する。まず、R. セネットの定義した、恐怖と不安を区別するための相違点としての確実性と不確実性という軸にたいする著者の批判が有効なものではないということを提示する。そのうえで、なぜ著者がこのような“間違い”をおかしたのかを検討し、恐怖と不安が区別されなかったことによって起こった本書の問題を確認する。そして最後に、恐怖と不安を区別するためにはどのような作業を行うべきかという問いを立て、評者なりの提案を行う。

4-1. 確実性の恐怖、不確実性の不安

本節ではまず、セネットが論じ著者が退けた、恐怖と不安の概念を区別する際に議論の俎上にあげられる確実性と不確実性について検討する。だが検討を始める前にここで、恐怖と不安の区別にたいする評者の立場を提示しておく。すなわち評者は、恐怖と不安は、対象の現前の有無という観点から意味付けられる確実性と不確実性という概念を用いることである程度区別できるようになる、という考えのもとで以下の議論を進行させる。

著者は、はじめに恐怖と不安という概念の区別について、R. セネットの「不安は起こるかもしれないことと結びついている。怖れは起こっていることと結びついている。不安は不確実な状況において起こり、怖れは苦痛や不運が確実なときに起こる」(2006=2008:56)という部分を引用している。そして著者は、セネットが行った恐怖と不安の区別にたいして、死が確実に起こる出来事である一方で、いつどのような形で起こるかは不確実だという例を持ち出して、「実際には、恐怖と不安は複雑にからみ合っている」(本書:15)と論じ、セネットが安易に恐怖と不安を区別したことに疑問を投げかけている。確かに一見したところ、死の想念には恐怖と不安が同居し、それらが複雑にからみ合っていると捉えることもできる。だが、著者が

、 から、地震や津波といった災害を他者と考える。

ここで示したのは、“死の想念”が確実性に依拠した恐怖と、不確実性に依拠した不安という、異なるふたつの側面を持ったものであるということであり、恐怖と不安が同一の意味を持った並列可能な概念であることを提示したわけではない。つまり、ここで著者がセネットの定義にたいして行った、死の想念は恐怖と不安という二つの側面を持っているがゆえに恐怖と不安は複雑にからみ合っているという議論は、恐怖と不安が並列可能な概念であるということを示すための根拠にはなっていないのである。

ここまでの議論で評者は、著者が恐怖と不安をこれ以降の章で併記することになる理由についての記述が有効なものでないということを示した。しかし、併記することが有効でないということを示すだけでは、恐怖と不安をこれ以降でどのように扱えばよいのかが見えてこない。そこで評者は、引き続き確実性と不確実性という概念に着目しつつ、なぜ著者がこのような“間違い”をおかしてしまったのかという点を検討する。

ここでは、本書でも何度も言及されている Z. バウマンの議論を補助線として用いる。バウマンは『液状不安』において、『「不安」とは、われわれが持つ不確実性 (*uncertainty*) に、われわれが与えた名前である』(2006=2012:8)と論じている。ここから、バウマンがセネットと同様に、不安が不確実性に依拠した概念であるという立場をとっていることがわかる。そのうえでバウマンは現代社会を、明日が今日と同じようにはならないだろうし、実際ならないことがわかっているという不確実性だけが確実な社会だと分析している。このバウマンの分析から考えると、現代社会は、不確実性という確実性が支配している社会という、一見するとこの二つを非常に区別しづらい、著者の言葉を借りるならば、不確実性と確実性が「複雑にからみ合っている」社会だと言うことができる。だが、バウマンがここで論じているのは確実性についてのみであり、確実性の外側に存在する完全に予測不可能な、あらゆることが起こりうるという意味での不確実性という観点は想定されていない。つまり、未来にたいする不確実性という確実性に対置されるのは、まったく予測不可能な、未来にたいする不確実性という確実性すらも排除された絶対的な不確実性なのだ。そしてこの現代社会の確実性と不確実性にたいする複雑さこそが、恐怖と不安を並列させながら、現代社会の分析を可能にしまった原因である。著者は、確実性の側面のみを見て恐怖と不安を区別するための分析を行っていたため、恐怖と不安は複雑にからみ合っているとしか結論づけることができなかった。

ここまで見てきた現代社会における確実性と不確実性の複雑さに、著者が絡めとられたことを示す部分が本書には存在する。著者は「はじめに」で、映画監督であるアルフレッド・ヒッチコックの「恐怖は、銃声ではなく、銃声の予感に宿る」という発言から「恐怖と不安は、不確実性ではなく、不確実性の認識に宿る」(本書:15)という命題を導出している。この命題を見た時点ではまだ、恐怖と不安は複雑にからみ合っているがゆえに簡単に区別することはできない、という著者の分析は誤っていないかのように思われる。だが、銃声が呼び起こす死の想念に抱かれる恐怖と不安は、さきほど確認したように、一つの対象に存在する異なった二つの特徴として認められるものである。しかし著者はこの部分で、不確実性の認識という確実性に依拠した恐怖と、まったくの不確実性に支配された状況で想起される不安とを同一の軸で捉

えてしまっている。その結果、著者は“恐怖は不確実性の認識という確実性に宿り、不安は不確実性そのものに宿る”といったような明確な区別をすることができなかったのだ。このように、本来は異なった概念であるはずの恐怖と不安を著者が区別できなかったのは、セネットの定義に出てきた不確実性と確実性について踏み込んだ分析をしなかったがゆえに、不確実性と確実性の双方に言及していると思いついたまま、確実性にのみ焦点を当てて恐怖と不安を区別するための議論を進めてしまったことに起因するといえるだろう。そして区別せずとも現代社会を分析することができたのは、前述したように、現代社会それ自体が不確実性と確実性の複雑に入り組んだ社会だからである。次の節では、著者が恐怖と不安を区別しなかったことによって起こった本書の問題点を確認したうえで、恐怖と不安という二つの異なる概念が、どのようにすれば区別できるのかという点を検討する。

4-2. 死の恐怖、死への不安

恐怖と不安を区別しなかったことによって、本書はどのような問題を抱えたのか。結論から述べると、恐怖と不安を並列したまま議論を進めることによって、本書は現代社会の特徴を捉えそこなっている。その特徴とはすなわち、個人化し、恐怖と不安に充ちた非コミュニティ社会である現代社会が資本主義社会だというものである。

なぜ評者は著者がこの視点を見落としていると考えるのか。議論を進めるためにここでは、真木悠介『時間の比較社会学』を補助線として用いる。真木は、死の恐怖こそが「近代的理性そのものを究極においてふちどる恐怖」(1997:2)だと論じる。そして、自分は確実に死んでしまうのだから生は空しいものだという考えは「〈未来が現在の意味である〉という感覚 (instrumentalism)」(1997:6)によって呼び起こされるもので、未来を想定して生きていくうえでこの感覚に陥るのは不可避だと論じる。つまり真木によると、未来に依拠した形で現在を過ごしているということは、やがて確実に訪れる死から目を背けられないということであり、未来に確実に訪れる死を前提として生きるということは、人々の生を空しくさせることに繋がるという。この、未来に依拠して現在を生きるという生活のスタイルは、来年は今年よりも成長させる(儲ける)という資本主義社会の根幹をなす思考と非常に親和性が高いといえるだろう。このように資本主義社会は、未来の不確実性という不安を社会構造の中に内包しており、そして、不確実性の行き着く先にある、死の確実性という恐怖もまた不可避的に社会構造の中に内包しているのだ。このように、現代の資本主義社会では、確実性に依拠した恐怖と不確実性に依拠した不安はそれぞれ違った側面を持ちながら共存しており、そして両者はそれぞれ現代社会において非常に重要な意味を持っている。だが本書は、確実性に依拠した恐怖と不確実性に依拠した不安とを混同させたまま考察が進んでおり、その結果、資本主義という、現代社会を分析するうえでは不可避の前提をうまく捉えきれないまま議論が進行してしまっている。

本書は資本主義という、現代社会の根底に流れるシステムについて十分に紙幅を割いて議論を行っていない。そして、ここまで何度も言及しているように、このような問題が生まれた原因は、著者が恐怖と不安を区別しなかったということにある。それでは、恐怖と不安はどのよ

うにすれば区別することができるようになるのか。評者は、特定の対象にむけられた“普遍的な”不確実性と確実性という観点を導入することが、恐怖と不安を区別させるための方策の一つだと考える。この場合、恐怖と不安は一つの対象のなかで並立する概念として捉えられることになる。だがこれは、恐怖と不安が同じ意味を持った概念だということではなく、一つの対象に存在する二つの側面ということを意味しているのであり、このことから評者は、恐怖と不安を同じベクトルで論じることがそれぞれの概念の特徴⁴⁾を殺してしまっているという考えのもとで以下の議論をすすめる。

では、普遍的な不確実性、確実性とは一体何なのか。それは本書でも論じられている、人間に絶対的に備わっている死の確実性と死への不確実性である。死は確実に我々に訪れる。だが、いつどのような形で訪れるかは不確実である。この当たり前で絶対的な事実が我々に示していることは、死をもたらす対象が我々の目の前に出現している時に抱かれるのが恐怖であり、対象が出現していないにもかかわらず、いつか訪れるかもしれない対象のことを考えて怯えるのが不安であるという区別である。著者は現代社会において自然死という形の死はほとんどなくなり、多くが社会関係によってもたらされる“事故死”だと論じている。著者は、わたしたちが「殺人事件の報道に接するたびに、恐怖と不安に襲われる」（本書：28）という例えを持ち出し、社会関係によってもたらされる“事故死”が「わたしたちの恐怖と不安の最大の源泉の一つ」だと分析する。確かに、普遍的な不確実性および確実性の視点を導入せずとも、“事故死”を恐怖と不安の最大の源泉の一つとすることはできるだろう。しかし、普遍的な不確実性の観点から考えると、殺人事件の「報道に接する」際には恐怖は存在せず、ただ自分も同じ目にあったらどうしようという不安だけが存在する。そして恐怖を覚えるのは、われわれの不安が現実のものとなったとき、つまり目の前に殺人犯が現れ、われわれに刃物を向けて迫ってきているときなのである。このような区別は、普遍的な不確実性と確実性の視点を導入することで得られるものであり、恐怖と不安を分析軸とする本書に必要な、だが欠落している視点だと評者は考える。

それでは、普遍的な不確実性と確実性の視点を導入し、恐怖と不安を区別することによって、本書の議論はどのように変更されるのか。この区別の導入によって、本書はまず、恐怖という側面と不安という側面を恒常的に内に含んでいる資本主義のシステムを、より明快に議論の俎上にあげて分析することができるようになる。そして、資本主義についての言及を深めることで、現代社会における個人化とグローバル化に伴う各人の普遍的確実性による“恐怖”と普遍的な不確実性による“不安”のそれぞれの様相が、別の視点から浮き彫りになる。たとえば、第二章では分離することの恐怖と不安を議論しているが、恐怖と不安を別々のものとして考えることで、分離してしまうかもしれないという不確実性からの不安と、分離することが確実なものとなった、もしくはすでに分離してしまったがゆえに起こる恐怖という、二つの側面に光を当てることが可能となる。結果的に、グローバル化と個人化がもたらした恐怖と不安と

4) ここでいうそれぞれの概念の特徴とは言うまでもなく、恐怖に備わった確実性、不安に備わった不確実性という特徴である。

いう議論の骨子が、グローバル化と個人化がもたらした恐怖の側面と不安の側面という、二方向からの似てはいるが異なったアプローチによって分析されるようになる。この二方向からの異なった分析は、恐怖と不安を一つ概念として扱うのでは見えてこなかった、グローバル化し個人化した資本主義社会である現代社会の新たな側面を映し出すことを可能にすると評者は考える。

5 おわりに

本稿は、恐怖と不安をキーワードにして現代社会の非コミュニティ化と個人化を論じた本書の社会学的意義を論じたうえで、恐怖と不安は異なる別の概念であり、これらを区別して理解する必要があるということを示した。すなわち、恐怖と不安という共通感覚は、共有価値による社会統合が見込まれなくなった現代社会において新たな連帯を生む可能性を持つものであり、社会学においては現代社会を分析するうえで非常に意義のある概念となるということ。だが本書は、不確実性と確実性についての言及が不十分であったため、恐怖と不安という異なる概念を、ひとまとめにして議論をすすめてしまったという欠点があるということ。この二点を本稿では検討し、課題点を解決するための方策として、普遍的な不確実性と確実性の概念の導入を提案した。

最後に、本稿では扱いきれなかった課題点を提示する。まず、恐怖と不安というネガティブな感覚を、果たして連帯のための道具として積極的に用いても良いのかという点である。著者は、一貫して恐怖と不安をネガティブな意味合いで用いている。しかし恐怖と不安は－結合の裏側には分離がつきまとうように－喜びや安心といったポジティブな感覚と表裏一体である。たとえば、はじめにで例示したようなマイノリティへの強い風当たりなどは、被差別者への恐怖と不安が突き付けた最悪の連帯だと言うことができる。こうした事実を踏まえた際、恐怖や不安を連帯への契機として検討することは、スケープゴート論の容認とらえられてしまう可能性すらあり得る。しかし本稿の議論は、当然のことながら、スケープゴート論を容認する立場で展開したわけではなく、むしろスケープゴートを作り出さないためにも、他者に宿る恐怖や不安と正面から向き合う必要がある、という立場から展開したものである。だが、この点に関しては十分な検討ができなかったので、今後の課題としたい。また前述した課題点と関連して、恐怖と不安によって生じた連帯に関する様々な事例を検討する必要がある。本書では、東日本大震災によって生まれた連帯が取り上げられているが、それ以外にも存在するだろういくつかの具体的事例を比較検討することで、恐怖と不安による連帯の功罪を見ることができのではないだろうか。こうして経験的な事例を集め、客観的に比較しながら検討を進めることで恐怖と不安が社会学の概念として更なる意味を持ち、現代社会における連帯の可能性の模索という役割を果たしてくれるようになるかと評者は考える。そして、本稿第4章でも論じたように、評者は、恐怖と不安はある程度区別される必要のある概念であるという立場をとる。もちろんこの二つは非常に近い概念であり、ニュアンスとして重なり合う点があることも認めら

れる。だが評者は今後、あえて恐怖と不安は区別可能なものであり、区別されるべき概念であるというスタンスをとりつつ、本稿では十分に解明できなかった両概念の一致点、不一致点をさらに分析及び精緻化し、恐怖と不安をそれぞれ異なった概念として、社会学のディシプリンに位置づけるための研究を自らの中心的課題として据えることとする。

【参考文献】

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Modern*, Suhrkamp Verlag. (= 1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会－新しい近代への道』法政大学出版局.)
- 三上剛史, 2013, 『社会学的ディアボリズム－リスク社会の個人』学文社.
- 盛山和夫, 2011, 『社会学とは何か－意味世界への探究』ミネルヴァ書房.
- Sennett, Richard, 2006, *The Culture of the New Capitalism*, Yale University press. (= 2008, 森田典正訳『不安な経済／漂流する個人－新しい資本主義の労働・消費文化』大月書店.)
- Zygmunt, Bauman, 2006, *Liquid Fear*, Polity Press. (= 2012, 澤井敦訳『液状不安』青弓社.)
- 真木悠介, 1997, 『時間の比較社会学』岩波書店.